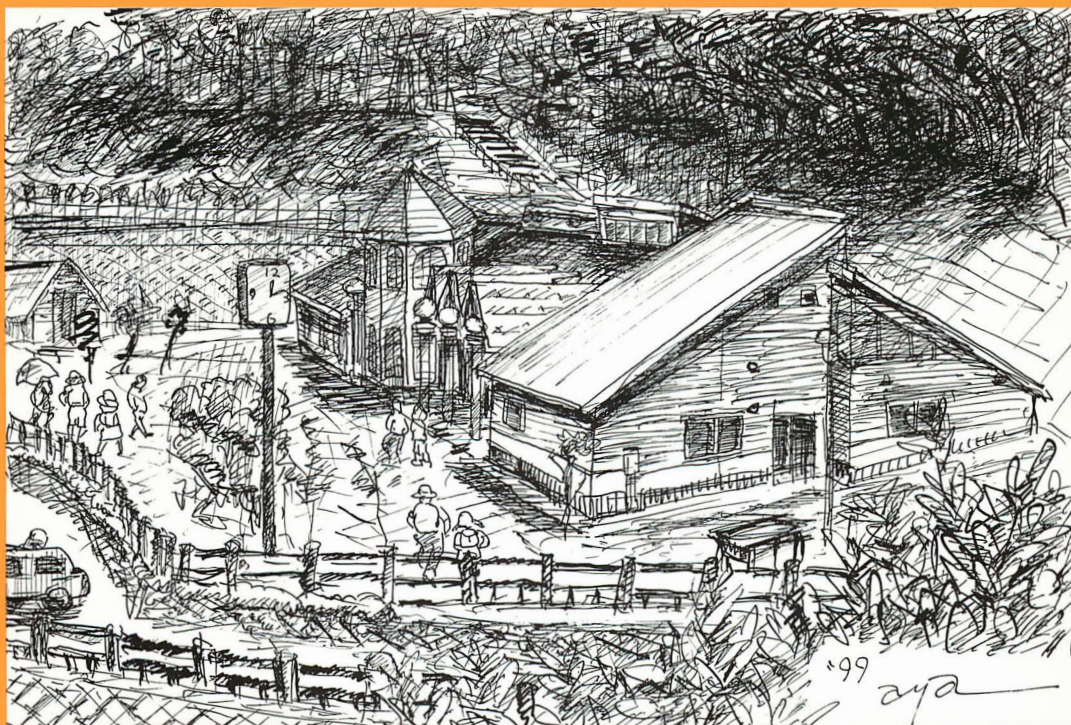


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.62



霧の高原

特 「1999 時代が変わる 何かが芽生える」 集

—自然と共生するまちづくり—

- 山里暮らしは ゆっくり ゆたかに
- ホテルを守ることは自然を守ること
- 重信川の水環境を楽しく健康診断
- えっときれいになあれ
- 「海は恋人」運動

論談 まちづくり—

愛媛大学工学部教授

柏谷 増男

■キラリ光るまち

滋賀県 甲良町

山田 禎夫

■

(株)うしぶか 総支配人

山田 大蔵

好評連載

★歩キ目テス&足ラテス

岡崎 直司

アングル

国際交流のあゆみについて愛媛県町村会長 宇和町長/宇都宮象一 1

特集

『1999 時代が変わる 何かが芽生える』

—自然と共生するまちづくり—

山里暮らしは ゆっくり ゆたかに大洲市/亀本 耕三 2

ホタルを守ることは自然を守ること中山町/峯岡 安則 4

重信川の水環境を楽しく健康診断松山市/武井 糸 6

えっときれいなあれ伯方町/今野 道子 8

「海は恋人」運動三崎町/堀田 春樹 10

論談—まちづくり—

まちづくり運動の新たな課題としての地域環境改善愛媛大学工学部教授/柏谷 増男 12

キラリ光るまち

『せせらぎ遊園のまちづくり』滋賀県甲良町/山田 禎夫 14

リレーでちょっとク

つながりの中で生きる松山市/今川 大将 16

出会いを大切に—国際交流内子町/中田佳奈子 17

まちづくり仕掛人応援歌

地域と共歩 三セク(株)うしぶか熊本県牛深市/山田 大蔵 18

研究員レポート

浜田広域市町村圏との交流を通じて小川 龍児 20

再び「ローカルに生きる」ということ藤田 享 22

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

伊予路の端々橋巡り岡崎 直司 24

Information

媛のくにフラッシュ (小松町・久万町・内子町) 26

読者の声・こえ・声 28

まちセンからのお知らせ 29

特集「一九九九時代が変わる」

何かが芽生える」

今号のテーマ

自然と共生するまちづくり

今「地球の温暖化」をはじめ「オゾン層の破壊」「酸性雨」など多くの環境破壊が地球規模での深刻な問題としてクローズアップされています。

また、私たちの身のまわりでも、「ゴミ問題」や「水質汚濁」「環境ホルモン」「ダイオキシン」などが問題になっています。

国や自治体、企業でもこうした環境問題への対応策に取り組み始めてるところですが、私たち自身の生活の中でも、やらなければならないこと、やれること、もいろいろあるはずですよ。

そこで今号の特集では、県内各地において、身近な暮らしの中で環境問題に取り組みながら、自然と共生する環境にやさしいまちづくりをすすめているグルーブや人を紹介します。

(編集子 沖田)

表紙の言葉

舞たうん六一号を手に、「霧の高原」オープンの記事を頼りに新宮村に行く。高原という夏っぽい憧れの場所に心踊らせ、ブナ活き水や霧の森に立ち寄り、頂上まで三〇分、くねくね細道を一気に上る。

霧の高原の施設が目に入ると、やっぱり高原だ。空気も清々しい。塩塚高原へ来る。ここまで来ると空を飛びたいなあ。パラグライダーでゆっくり山々の景色を味わいたい。家路に着いて新宮茶のたっぷり効いたお茶菓子で一服。

柳原 あや子



愛媛県町村会長

宇和町長

宇都宮象一

(当財団理事)



今を去る一六〇年の昔、田舎の宿場町卯之町に碧眼紅毛の美しい混血の娘がやってきた。そして五年間ここで生活、勉強して蘭方初の女医となった。

司馬遼太郎の「花神」、吉村昭の「ふおんシーボルトの娘」に詳しく描かれている楠本イネの青春時代の事であります。

一昨年、宇和の先哲記念館において盛大にシーボルト展覧会を開催し、シーボルトの

五代目の子孫ヴェルツブルグのブランドインシユタイン兄弟を遙々ドイツから、お伊ネさんの四代目の子孫米山明氏を東京から宇和町に招待し、テープカットをして握手され、感激の対面となった次第であります。

シーボルトが国禁を犯し国外追放となつてから、彼の最も信頼する弟子二宮敬作が卯之町で開業したことによつて、その娘イネさんが宇和へ来る事になつたという出来事が今の人の心に残り、今日の交流のきっかけとなつた訳です。

もう今年で七回目を数えますが、宇和の中・高校生十名をドイツに派遣し、シーボルト協会会員宅にホームステイさせて頂き交流を深めた事で、昨年はドイツから十名の高校生を宇和にホームステイとして迎え、ヴェルツブルグ市長も来町して頂きました。

本年十一月には、ドイツ、ヴェルツブルグのシーボルト博物館の一室を借りて宇和町

展を開くことになりました。オープンセレモニーの為に町民各位に自費による参加を呼び掛けたところ百名を超す応募があり、宇和の五ツ鹿踊りも一緒に盛大にやって来るということになっています。

今年ドイツの首都がボンからベルリンへと移る年で、これを記念してドイツ各地で日本デーを開いて盛り上げようという外務省からの要請もあり、我が町もこの計画となつたのですが、百名を超す町民の参加には感激と同時に国際化時代がここまで浸透しているかと改めて考えるものです。

この秋のイベントの前哨戦として、この春三月二十五日から四月一日の八日間、「99 女医の道お伊ネさんウォーク」を計画し実行いたしました。十四才のお伊ネさんが歩いて宇和へ来た道を再体験しようというものです。

中学高校生も十五名、一般参加者二十名、サポート隊五

名の四十名がお伊ネさんと敬作の眠る長崎市皓臺寺を朝六時出発し、熊本県大津町、阿蘇町、大分県竹田市、三重町、白杵市と各々の公民館や集会所で地元の人々の暖かい歓迎を受けながら、持参の寝袋で寝ながらの強行軍で全員無事完歩して宇和町まで辿りつきました。

冒険家の河野兵市さん、イギリス人中学英語教師のション先生も特別参加して全行程をリードして頂きました。宇和では大勢の町民が出迎え、全員感激の涙で対面いたしました。秋に計画しているイベントを盛り上げる素晴らしい前哨戦となつたわけです。

一六〇年前に十四歳のお伊ネさんが卯之町に来た、その一粒の種が宇和のオリジナルの国際交流の花として大きく開こうとしています。大切に育てていきたいものです。



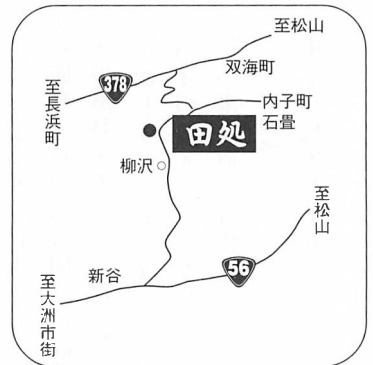
の地域だ日本のブルガリアだとプラス思考し、ここ田処が一番いい所だとこだわっております。

現在、田処小学校は児童数十二名の大洲市内で一番の小規模校ですが、地域の人達、PTA会員の学校への協力は素晴らしいものがあります。この温かい人情と自然が大好きで私は家族で十数年前Uターンをしてきました。



田処の財産と言えば、ホテルが乱舞する清流、先人が汗水を流して築き、尊い命までも犠牲にして守った山の中腹まで続く棚田、満天に輝く星空等、都会にはない魅力がいっぱいある地域です。

夜九時も過ぎると家の灯りが一軒も見えなくなるので、この無数の星は自分だけの為



いかと錯覚するほどの素晴らしい星空が見える所です。

山里暮らしから感じる事

最近水問題がよく話題に出ますので山里暮らしから感じる水の事について述べさせていただきます。

川の水量も昔と比較すると随分減ってきました。せっかく降った雨も、すぐに下流に流れてしまうように思われます。近年雨の後の増水した水量が元の水量に戻るのが随分と早くなっているように感じられます。この事からも分かれますように現在、山の保水力はいろんな原因で少なくなったのではないのでしょうか。

原因については、詳しくは分かりませんが、昔の水量が豊かな時代との違いから次の事柄が考えられます。

① 雑木林が減って杉、檜の林が大幅に増加した。特に戦後の植林から五十年位経過しているのて遠くから見ますと木が大きくなって緑がいっぱいですが、杉、檜の木の下には日光が当たらず小さい草木が全然生えていない状態の山が多く見受けられます。

② 山のいたる所に林道が整備され便利になったのですが、地中の水の道が林道により変わったと考えられます。道路により湧き水が出なくなった所もあります。

③ 棚田の面積が減反政策、労力不足、米価の低下等により、大幅に減っております。上流の人が田の耕作をしなくなる、普通で考えるところの下田では水が沢山利用出来ると思われがちですが、逆に水が少なくなると皆さん言われております。棚田はダム

都会にはない魅力いっぱい

大洲市田処は市内から約二十数kmと遠く離れ、北は双海町、東は内子町、西は長浜町に隣接し、昔からこれら三町との交流があった地域です。

人口二百七十人の過疎と高齢化の進んだ地域ですが、高齢者が多いという事は、長寿

の役割をしていたのです。

百年後の子孫のために

それでは山里に暮らす私達はどうすればいいのでしょうか。とりあえず今年から田処分館では一番身近な、木や森を守る為のささやかな取り組みを始めました。地域の皆さんにあなたの好きな木、森を教えてくださいと呼び掛け、現在十六箇所の応募がありました。この木や森を中心にして森林マップの作成やウォークラリー、コンサートを開催して、地域の人達みんなで木や森に親しみながら、考えていきたいと計画をしています。

この活動を通じて、百年後二百年後の私達の子孫達へのプレゼントとして、大きな木の保護や森づくりへとつながればと思っております。

私の裏山の雑木林は約百年前、先祖が自分の子や孫が風呂やかまどの薪に困らないようにと植林されたそうです。今では、大変大きな木になっ

ており、リスや小鳥、そしてフクロウも時々来て鳴いている、そんな森ができました。この森はこれからも大切に残したいと思っております。森の中に小屋を建てゆつくりと鳥の鳴き声や木の葉が風にゆれる音を楽しめるそんな場所ができたらと思っております。

大杉と言えば田処

田処小学校の校庭には樹齢二百年を越す大杉があります。この大杉をいつまでも、子供達、地域の人達みんなで大切にして欲しいと願いを込めて小学校、分館の各種行事には大杉の名前を付けております。校報「大杉」、大杉コンサート、大杉講演会、大杉映画会、大杉こども美術館、と大杉が主役の行事を開催しております。

この活動の取りまとめを行っているのが「大杉塾」です。PTA会員、OBを中心としたメンバーで、学校、子供達、地域の為にいい事は計画になくてもすぐ実行する元気な人

達です。これらの行事は地区内外を問わず皆さんに呼びかけ少しずつですが、交流の輪が広がってきました。

大杉と言えば田処と皆さんに言っていただけのような努力をしています。この二年間でコンサート五回（岐阜県の南さん二回、内子高校の郷土芸能部の和太鼓二回、松山のRIOさん一回）、講演会二回（横浜からリングの木代表柴田先生）、映画会一回、「どんぐりの家」上映と多くの皆さんに参加で校庭の大杉さんにも喜んでもらえたと思っております。

転入者を迎え入れて

またイターン、Uターンの方々を地域の人達が協力して温かく迎え入れております。特にイターンの方々は、みんなで空き家をボラン

ティアで修理をするなどしました。

三年間でイターン三戸、Uターン六戸、合計二十四名の転入がありました。転入された皆さんは、それぞれの立場で大変地域の為に活動をされ、感謝しております。転入された方々の新しい発想と協力により、今地域が変わってきました。

今後の課題は空き家の確保をいかにするかです。これからもみんな協力して楽しい地域づくりに取り組みたいと思います。最後になりましたが森に詳しい方、興味のある方ご連絡下さい。



大杉は田処小学校のシンボル

●連絡先（亀本まで）（0893）25—4404

ホタルを守ることは自然を守ること



峯岡安則

何ともいえない気持ちになりました。そこで、私は早速、商工業者二十九名とともに、三丁目振興会を発足し、町内の花飾り、ビアガーデン、カラオケ大会のイベントに取り組みました。その頃はまだ現在のように、イベントなど殆ど無く、皆珍しさもあり、大盛況でした。

ホタル保存会発足

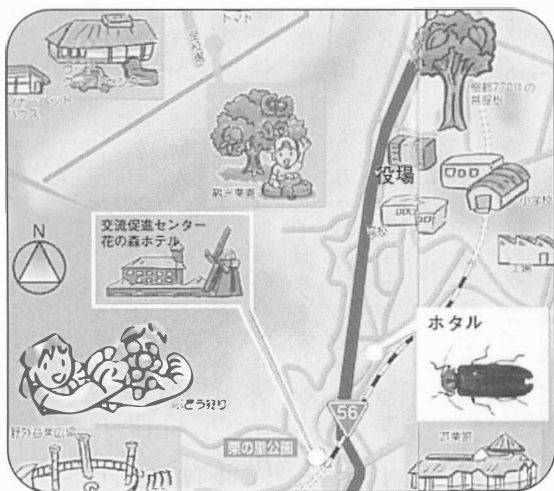
昭和六十年、一村一品運動がおこり、町おこし、村おこしが始まろうとしていました。

前町長故亀井氏より「峯岡君、町外から人の呼べるイベントをやってくれ。」との事で、中山町のためにやってやろうという友人に声をかけましたところ、十六名の賛同を得、昭和六十一年春、「伊予中山ホタル保存会」を発足することができました。

しかし、私は、昭和五十五年、松山市より中山町に帰ってきました。久し振りの中山町は、昔のような活気を失っており、

佐礼谷小学校の昆虫博士だった菅先生と小学校の児童で協力し、ホタルの養殖、増殖に取り組み事になりました。小学校では生態調査を行い、一方私達は、放流、増殖の研究を進め、初年度は七万匹の幼虫の孵化に成功しました。そして、昭和六十二年六月、第一回のホタル祭りを行いました。「あれ、見てごらん、これがホタルよ。本当のホタルよ。」この言葉を耳にした時、それまでの苦勞が一度に吹き飛んでしまいました。

本当にいろいろな事がありました。早いもので今年で十三回目のホタル祭りを行うことも出来ました。しかし、ふと今を見ると、どこの町村でも町からついた補助金をただつぎ込んだ何でもありのイベントが多く、少々寂しい気分



恒例の伊予中山ホタルまつり

なりません。

子供達とともに

ホタルの里づくり

今、中山町では、河川工事に関して、ホタル保存会に書類を提出していただいています。ホタルの生態に少しでもいい条件を作り出してやりたいためであり、卵の時期等は、河岸を工事しないでもらったり、また、土・砂が溜まりやすく、草の生えやすい岸の石



小学生にもホタルを守ろうとする活動が根付いています

中山中学校では二年前から生徒会ボランティア活動の一環として皆の力でホタルの喜ぶ川にしようとして、「中山川の清掃活動」を行って来ています。保存会の少ない人数では大変なことです。生徒百三十五名が自主的参加

積み等、色々な工夫をしていただいています。

ところが、工事をする人でさえこういった心配りをしていただいているのに、皆で守つていこうとしているホタルを根こそぎ取っていつてしまふ心ない人達もいます。

こんな事があつた時、小学校五年生の子供達は、「ホタルを捕まえるな、見るだけにしろ。」「川はゴミ箱じゃない。」「ホタルがいっぱい飛ぶ町に。」などと書かれたポスターを作り、町中のお店等に「ポスターを貼らせて下さい。」とお願ひし、一生懸命に頑張つてくれました。

をして我が故郷に誇りを持ち、故郷を大切にすることを育ててくれています。こういつた子供達が安心して楽しめるような自然を造つていきたいと思ふと共に、頼もしい後輩ができたという楽しみができて、嬉しくもあります。

みんなで守ろう

中山の自然

これからの環境保護は大変に難しい事が沢山あります。

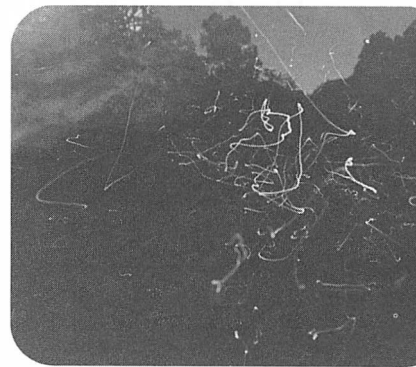
日本人は、文化的な生活をする為に生活排水を垂れ流し、河川工事の三方水路、農薬汚染と、自然を破壊し、放置してきました。快適環境を守る為に、今からでも一人一人が心を引き締め、自然を守らなくては駄目です。今すぐ勇氣を持って小さい事でもいい、自分の出来る事を実行していかなければなりません。

私達が快適環境のパロメーターであるホタルを復活させる事により、生活する皆が一歩前進した考えを持ち、皆で

美しい山川を守るんだという心構えを持つて頂ければ幸いです。

こうした協力を得て、今日では中山町全域の河川で、ホタルの乱舞を見られるようになりました。私達はホタルを増殖する事しか出来ませんが、この事によって河川に棲む小動物（ハヤ・メダカ・カジカ）等の生態系を守つていくことが出来るわけです。ホタルを守るという事は、自然を守るということなのです。

最後になりましたが、県の土木事務所・日本道路公団の方々の配慮に感謝すると共に今後ともご協力をお願い致します。



美しいホタルの乱舞



重信川の水環境を楽しく健康診断

水をきれいにする会 代表 武井 糸

した。講演会の参加者と呼びかけたところ二十四名が集まり、話し合いの結果、目的は「飲み水の安全性を高めるために、水道水の元になっている水（川の水や地下水）を汚さないよう自らの生活を見直し、周りの人にも広めていくこと」としました。

とりあえず楽しいことをしようとして実施した活動は、桑田一男先生（松山淡水ベントス研究所）の指導による重信川での水生生物調査でした。今では、環境庁や建設省が水辺環境教育の一環として推進したこともあり、夏になると当たり前のように各地で盛んに行われている水生生物観察会ですが、それまでは一部の研究者だけがおこなう非常にマイナーな分野でした。しかし、重信川の水生物を知り尽くしておられる桑田先生のおかげで、自然の水や生き物と親しむフィールドワークの仕方を実践により学ぶことができ、今にして思えば非常に

ラッキーなスタートをきることができたと思います。

重信川をフィールドにして

というわけで、以来会の活動は自分達が住んでいる地域の水の供給源でもあり、水辺環境を育んでもいる重信川流域を対象とし、フィールドワークを基本に続けてきました。水生生物調査（年一〜二回）、E V A S（陰イオン界面活性剤）や透視度の定期水質検査（年四〜五回）、川の探訪（年四〜五回）、学習・講演会活動、写真展、資料収集、要望活動など思いつくままに取り組み、活動報告を兼ねた会報（B4四〜八ページ）も年四〜五回発行しています。現在五十六号まで発行し、「還暦記念号」まであとわずか。

「水をきれいにする会」は期せずしてまちづくりセンターと同年で、昭和六十一年（一九八六年）生まれです。発足のきっかけは当時社会問題になっていた「飲み水の安全性」に関する講演会（愛媛有機農産生活協同組合主催）で

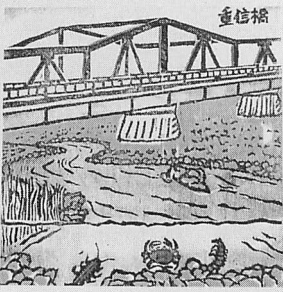
「水をきれいにする会」は期せずしてまちづくりセンターと同年で、昭和六十一年（一九八六年）生まれです。発足のきっかけは当時社会問題になっていた「飲み水の安全性」に関する講演会（愛媛有機農産生活協同組合主催）で

会員数は、一九九二年にNHK松山放送局制作「四国人間あいらんど」で紹介された後、五〇人をクリア。さら

に十周年の一九九六年に環境庁から地球環境基金の交付を受け、四年がかりで原稿を準備し、『重信川水系流域ガイドブック 地域の水環境を見つめて』という本を発行した後は一〇〇人をクリアしました。幸運にもこの本は「第十二回愛媛出版文化賞」（愛媛新聞社主催）を受賞し、地道な活動の積み重ねが少しでも地域の役に立つことができ、長く会費を払い続けて活動を支えてくれた会員に代表としてそれなりの責任を果たすことができホッとしました。

本の発行で川の探訪に一区切りついた後、現在は愛媛県立博物館発行の『重信川周辺

重信川水系流域ガイドブック 地域の水環境を見つめて



水をきれいにする会編

重信川水系流域ガイドブック (平成8年発行)

の泉とその生物』というパンフレットを片手に、泉ウォッチングを年五回行っています。

これからの会の活動

十三年半の間に社会状況も変化し、会の目的も微妙に変化してきました。当初は個々の人間の健康を守るため飲み水のために川の水をきれいにしようという直接的な利益を求めたものですが、地球環境が問題になってきた頃からは、地球上での将来にわたる人間

の生存を保証するため、多様な生き物が棲める水辺環境も大切にしようというかなり間接的な利益を考えるようになりました。

また、行政との関係も、批判する対象から、ではどうすればいいかという現実的な解決策を市民に要求される時代になり、実態を自分で調べ良くなるという姿勢になってきたように思います。「現実的な解決策の難しさ」が身にしみるこの頃です。



重信川・重信橋地点での水生生物調査の様子

の目的は達成されつつあるのでしょうか。答えは単純ではありません。重信川の水質は相変わらず環境基準を達成することができず、生活排水対策重点地域です。生物環境は道路整備や河川・水路改修によつて破壊された場所、農薬の低毒性化によつて水田の生き物が復活していること、護岸の改修工法が多自然型になっていることなど、プラス・マイナスあり横ばい、水道水

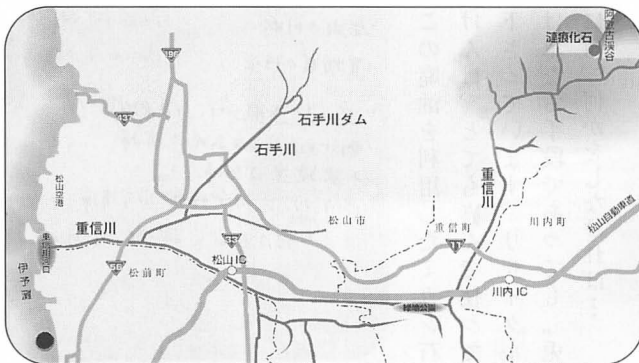
の安全性も今のところ極端な悪化、改善なく横ばい、というのが現状だと思っています。人口の密集地であることや使える予算や水源が限られていることを考えると、現状維持が精一杯といったところかもしれません。

年月を経るにつれ環境問題に対する社会的な関心が高まり、会員数は増えた反面、活動や運営への参加者の確保という悩みは十三年経った今も残念ながら同じです。今後はより少ないエネルギーで活動を継続できるよう、来年度より新しい運営形態を模索中。

ちなみに一九九九年六月より「重信川・泉わくわく通信」という泉の四季を紹介するホームページを個人で開いています。興味のある方はご覧下さい。

アドレス

<http://www.nttl-net.ne.jp/ecoshig>



重信川流域図



右から武井代表、メンバー松田さん、関谷さんとともに



今野道子

「伯方ゴミ問題を考える会」はゴミ減量の為、一九九五年に馬越睦司さんを代表に、会員十八名で発足しました。

最初は、さて何から始めて良いのか、やることは一杯あるはずなのにと思いつながら、それでも机上だけの勉強にとどまらず実行に移せたのは、云うだけの女性だけでなく、

男性の参加があり、協力があって、お互い二人三脚でやったことが、今日まで続けてこられた様に思います。また、ここには伯方町のゴミの焼却炉の寿命が目の前にせまり、このままでは、後四、五年しかもたないことがありました。

まずリサイクルから

ゴミを減らすには、まず分別とは云え、伯方町は燃えるゴミと燃えないゴミと粗大ゴミの三種分別です。環境問題を考える時、物を燃やすことでダイオキシシンが発生すると、分別は一日でも早く、本腰を入れて取り組みたい課題です。

そこで、まず我々に出来る事からと古新聞の回収を始め、最初は、微々たるものでも収入を得ていましたが、古新聞もだぶつき、逆に経費がかかるようになりました。今は三カ月毎の年四回の回収にかかる経費は行政が全て負担して下さり、止めることなく回収

を続けています。

又、割箸の回収は、各小中学校、高校、伯方警察署、飲食店の協力での回収し、ある程度集まれば呉の製紙工場に送っています。牛乳パック、トレイの回収もライフショップ、Aコープ、スーパーヤマキチの店長さんの協力で回収していただき、皆様の協力があればこそ出来ることと感謝しています。

後は廃油の石けん作りを高校生も交えてやっていますが、

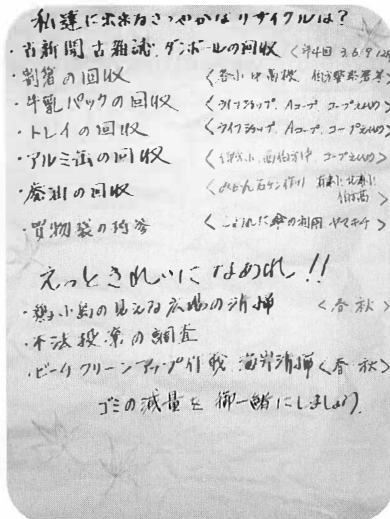


廃油を利用した手作り石けんは好評です

ゴミと云えども活かせば資源、活かさなければただのゴミ。楽しみながら、真剣に取り組もうと「眠っているピアノがあれば何処へでも行くヨ」と云って下さった河野ヤスヒロさんと呼んで伊方小学校の音楽室でジャズコンサートを開きました。ジャズを聞きながら、トークでワッハッハッと笑い、好きなビールも海や

楽しみながら真剣に

この廃油を利用したミカン石けんは、とても喜んで使って下さっています。リサイクルは単なる手段であつても、鬼に角「何かをしなければ」:



幅広い活動に取り組んでいます

川を汚さない為に残さず飲むヨと・・・

又、環境NGO活動でご活躍されている枚本^{すきもと}育生先生のお話を一度今治市民会館で聞かせていただき、私達に解る言葉で話して下さい、とても良かったので是非にとお願いして、京都から来ていただき、「私達にできること」―子供達に美しい地球を引き継ぐ為に―と題して講演をお願いしました。

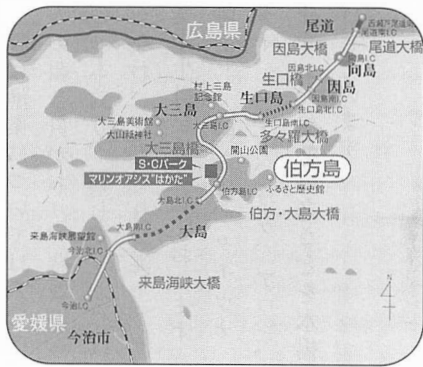
この時は、伯方小学校の五年生全員の参加があり百名余りでしたが、子供達はメモを取りながら真剣に聞いていました。子供達が参加することにより、父兄にも反響があり、子供達が電気の節約のため電源を切ろうと、コンセントを抜いたり、聞いた事をすぐ実行に移しているそうです。私達も見習わなければいけないし、子供の教育の大切さも痛感しました。

でも、手本となる大人がまずやらなければと思っていた

ら、伯方中学校の生活環境部の父兄の方から、一二年でなくもっと長くゴミ問題に取り組みたいと相談があり、お互い意見を交換しながら、一緒にやっていけることになりました。町民の意識が少しずつでも変わってくれることを望んでいます。

えっときれいなあれ

しまなみ海道が開通して車の量も増え、人の数も増えれば、ゴミの量も増えるのではと心配でしたが、開通しても伯方は見事に通過点となり、ちよつと淋しい気もしました



ビーチクリーンアップ作戦

が、海開き、夏まつりには、車、車、人、人。皆さんゴミは自分で持ち帰りましたか？ “えっときれいなあれ”の旗をかかげて鶏小島の見える広場の清掃をしています。最初は道路から見えない場所に粗大ゴミの山でしたが、近頃は、ゼロとはいえないけど減ってきています。

ビーチクリーンアップ作戦も年二回していますが一回は、伯方高校生全員参加で二年前から海岸清掃をしています。少しずつですが輪が広がってきているのを感じます。ゴミの減量のために努力し



メンバーとともに（前列左から3人目が今野さん）

て四年、減ったかどうかは自信はありませんが、一人でも多くの方達が、ゴミに対しての意識を高めて下さることを望んでいます。環境ホルモン、ダイオキシン問題全て人間がやったこと。自分達の蒔いた種は、自分で刈り取る責任があると思います。これが子供達の為になり、自分自身のためでもあると思います。皆さん一緒に頑張りましょう。



漁業のまち三崎

私達の住む三崎町は、佐田岬半島の先端に位置し、北は瀬戸内海、南は宇和海、西に夢の架け橋が計画されている豊予海峡と、三方海に囲まれ温暖で大変風光明媚な所で、主に漁業と農業の半農半漁の町です。

特に漁業については八〇〇人の組合員がおり、昔ながらの一本釣り、刺し網、ふぐはえなわ、素もぐり(海士)漁業で生計を維持しております。岬あじ、岬さば、タチウオ、タイ、ハマチ、フグ、アワビ、サザエ、伊勢海老などを水揚げしています。



私達の「漁業後継者」は、三崎漁協を母体とした協議会で、三十歳以下の男性十七名で活動を行っております。

毎年行事としましては、販売流通、資源管理の見聞を広めるため魚市場や県の水産課などへ行き研修を実施していきます。また月に二回は海浜清掃を行うとともに、七月二十日の海の日には、中学生、漁協婦人部の協力を得て組合員

全員で海に感謝の気持ちをこめ海の清掃を行っています。佐田岬半島沖の漁場は先輩、先輩達によって守られてきました。その恩恵により私達、漁業後継者が地元に残り生計を維持出来ているという感謝の気持ちは全員がもっております。

海を守るために

最近ゴミにより少しずつ漁場の荒廃が進んで来ています。漁港内においても遊漁者等による空缶、残餌、空弁当箱などのゴミの汚れが目立っており、目を山に向けますと道路端には空缶、ゴミが散乱しております。これでは海は汚れ、魚や貝類の住めない海になるのではないかと心配しておりました。

将来自分たちの子供が地元三崎に残り漁師になりたいと相談があった場合、「海が汚れて魚介類がおらんけん都会に働きに行けや」という返事をしなくてはならない状態に海

がなっていた場合は、長年佐田岬の海を守った先輩、先輩に申し訳なく思います。また、海を最も利用し恩恵を受けている漁業者の中にもゴミ等を捨てるものがあるということ、自分たちの恥ではないかという現実の反省に立って、何も声を出して言わない海を守り、永遠に海と付き合っていくには、漁業者一人一人がも



う一度「海を守る運動」の原点に返り、海を大切にすると魚介類が昔のように多く見られる海を取り戻す努力が必要であると認識したのです。

そこで組合員の漁船にゴミ箱を積んでもらい、空缶や不要漁具等を港に持ち帰ってもらうことにしました。このゴミ箱には、漁業者にも何と言われないで黙って耐えている海を守り優しく接してもらいたいという後継者会員の気持ちを込めて「海は恋人」と名付けました。

運動の効果が少しずつ

この「海は恋人」運動を始めてから約四年になります。三崎町の主要漁港には陸上の「大型ゴミ箱」、町内の漁港には「海は恋人」の看板を設置しました。

先代の会長の時には東京まで行き「海は恋人」運動の活動を発表したり、愛媛新聞社に表彰されたりと頑張ってきました。



漁船内のゴミ箱

豊漁祭の前夜祭には若者交流会を開催し「海は恋人」運動の結果報告等を行い町民、佐田岬灯台への観光客等に呼びかけていますが、港の中にあるゴミが少なくなっていることが目に見えてわかっていくようになりました。

組合員の中には、タバコの吸い殻や海に流れていたナイロン等のゴミなどを拾い、港まで持ち帰ってくれる人などがいます。

また各漁港に釣りに来ている遊漁者の方々にも餌、弁当、ジュースの空缶等を防波堤から袋に入れて帰る姿を見かけ



港に設置された大型ゴミ箱

たり、家族連れで遊びに来たと思われる団体の人々が掃除している様子を目にします。同じ漁場で漁をしている大分県、広島県といった漁師さんたちも沖で最近三崎の漁師がゴミを回収している様子を見て少しずつではありますが海にゴミを捨てる事が「はずかしい」という意識が芽生えているように思われます。

このことを考えますと、自分達が今までやってきた事は、無意味なことではなく、ほんの少しずつではあるけれど効果がでてきていると思っています。これからも、組合員の

方に呼びかけていき、全組合員が空缶や不要漁具等を港に持ち帰ってくれる様、協力をお願いしたいと思っています。海を一番よく利用し生活の場としている漁民が海を守ることは最低モラルであると思っています。それを守ることで町民の方々、観光客にも協力を得ることが出来ると考えています。

この「海は恋人」運動を町民の方々に尚一層理解していただき輪を広げて行き、すばらしい海、山の自然を残す事が我々地元に残った若者の使命ではなからうかと思えます。

この小さな運動を地元から町外へと輪を広げていく事により、国民共有の財産でもあるこの広い海は、昔の姿に戻り、国民憩いの場となるとともに、生活のたてになつてくれることを信じております。そして魚や貝が二世、三世の夢を見ながら生活できる豊かな自然を回復できるものと期待しています。

まちづくり運動の 新たな課題としての地域環境改善

愛媛大学工学部教授

柏谷 増男



筆者も「えひめ地域づくり研究会」のメンバーであるが、研究

会議の活動をこれまで距離を置いて眺めさせていた。研究の中心的な役割を果たしてこられた方々はいずれも人間的に魅力にあふれた人ばかりで、地域づくりを積極的かつ大いに楽しんで推進され、また立派な成果を挙げている。なじみない私の方がどうかしているとも考えられるが、皆さんの「この指とまれ」的な自発的活動に対して、本当にそれだけで地域づくりができるのであろうかという違和感を抱いてきた。

* * *

私の専門は都市計画であり、都市環境の整備も都市計画の中の重要な一分野である。都市計画の手法は大きく分けて規制と事業であり、規制は都市計画区域住民全体に対して法的効力を持って財産権を制限する。

都市計画の規制についてはこれまでにも多くの人々から批判が寄せられている。お上あるいは計画者の勝手な理想像を市民に押し付けるとか、十九世紀的都市像に固執して現在の市民の自由な活動を抑圧するとの意見である。確かに

現行の都市計画はいわゆる近代の都市像をかたくなに保持しようとしており、融通のきかないしろものである。しかしながら、人のいやがる規制を強制しなければ快適な都市環境の土台は築けない。

結論を先に言うと、下水道の使用を義務づけないうかり、いくら市民運動を展開しても、清らかな流れの川を取り戻すことはきわめて困難である。住民の粘り強い自発的な運動が市民一人一人の心を目覚めさせ、一人一人が排水の浄化に熱意を持って取り組めば、下水道整備なしに清流を甦えさせることは論理的には不可能ではない。けれども、ごく少数でも汚水を大量に排出する人がおれば、多数の市民の努力は台無しになってしまう。公権力を後ろ盾にした規制が必要とされるゆえんである。

地域づくりの活動家の舞台は、規模の大きい都市よりもむしろ一人一人の顔がわかる程度の町や村が多い。その程度の自治体では自発的な運動の輪を広げることによって、前向きな運動や事業をかなり推進できることは、これまでの

「えひめ地域づくり研究会」の活動成果が何よりも物語っている。しかしながら、小規模の市町村であっても、ごく少数の人々の心無い行為によって目標達成が阻害されるような環境問題に取り組むことは容易ではない。

地域づくりの活動家があるような不心得者に対峙して、対話や説得でどうしても解決できなかった時にどうするのであろうか。もしも、その活動家がある場合に公権力で力づくに押し切ろうとするならば、地域づくり運動はその時点で破綻してしまわないだろうか。環境問題はそのような側面を持っている。

都市計画という立場は始めから公権力を背負っている。その事に対する後ろめたさやいやらしさを計画者も知ってはいる。しかし、都市に住む、あるいは都市的な生活をするということはそういうことなのである。近代以前のヨーロッパでは、都市居住の厳しい規則を遵守することを宣誓し、多額の税を納める者のみが、城砦と傭兵に守られた都市に暮らすことがで

きたのである。都市に住むための規則を守れない人々を都市から追い出すほどの覚悟がなければ、都市環境を向上させることは出来ない。

* * *

さて、県内の河川の水質をみると、西条市の加茂川のBOD濃度は $0.5 \sim 0.6 \text{ mg/l}$ 、今治市の蒼杜川では 0.5 mg/l 以下で良好であるが、肱川流域では $0.5 \sim 2.2 \text{ mg/l}$ で都市部の前記二河川よりも水質が悪い(注1)。野村ダムの汚染が著しいことは有名であり、鹿野川ダムでもアオコの大発生が生じている。かつての清流肱川の姿はとうに失われ、今、肱川は濁りと悪臭であえいでいるように見える時さえある。

以前は多くの農山村の市町村が山紫水明を誇りとしてきたが、今日では下水道が整備された都市部の河川が農村部の河川よりもきれいなことは関係者の常識となりつつある。農山村でも生活様式が都市化され、生活排水の負荷が大きくなったこと、畜産経営の大規模化等が一方の原因であるが、下水道整備が立ち遅れていることも主要な原因の一つである。

下水道整備の効果は大きい。松山市を流れる石手川のBOD濃度は $0.5 \sim 0.9 \text{ mg/l}$ で上記の東予二市よりも若干悪い。さらに重信川下流のBOD濃度は $2.7 \sim 4.3 \text{ mg/l}$ であり、県内では最も汚染された地域となっている。このデータは、松山市を始めとして重信川流域市町村の下水道整備率がそれらの都市に比べて低いことが原因になっていることを暗示している。

西条市は石鎚山系に源を発する豊富な地下水の恵みを受けた「水の都」であるが、かつて市民は必ずしも水を大事には扱ってはこなかった。昭和五十年代後半の市内の水路はどこも家庭排水や工場排水で汚れ、ヘドロが堆積し、さらにごみが捨てられるありさまであった。当然ながらこの状況を憂う市民も少なくなく、水をきれいにしようとする市民運動があちこちで発生しかかっていたが、問題の解決にはいたらなかった。平成に入ってからやっと市の中心部を流れる新町川水系が整備され、泉が甦ることとなった。人口約六万人の町の中心部に鮎が成長し、蜚が飛び交う川が見られるとはすばらしいことである。

しいことである。

その大きな原因は昭和四九年から取り組まれてきた公共下水道事業が実を結んだことである。経験則ではあるが、下水道整備率が50%を越えると川がきれいになるという。ちなみに西条市の平成六年度整備率は約五七%である。

下水道整備には多額の費用が必要であり、そのことに対する市民の合意がまず必要である。しかし、施設が整備されたとしても、普及率を向上させるためには地域住民に対する職員の粘り強い説得と断固たる態度が欠かせない。道路上の下水管から各家庭への引き込み費用は利用者負担であり、しかも新たに下水道料金を支払わねばならない。これに対して、排水をそのまま川に垂れ流せば無料である。西条市では、もともと上水道がないために下水道料金を支払うことへの市民の抵抗感は強く、下水道関係職員は苦勞続きであったようだ。

肱川流域では大洲市と内子町の整備率がそれぞれ 10.7% 、 6.3% であり、宇和町や野村町ではやっと整備にとりかかったにすぎない(注2)。残念ながら、

都市部に比べて農村部の所得は低く、下水道整備に伴う個人負担金の負担感はより強いと想像される。これも通説ではあるが、ある程度の自然に囲まれた農山村の人々は都市住民に比べて環境を守ることへの熱意にやや欠けるとも言われている。下水道整備に反対し、管渠網が完成しても使用を拒む住民も少なくないと予想される。しかしながら、こうした人々を粘り強く説得しないことには河川の汚染を食い止めることはできない。

反対者の存在を許さないと決意が必要であり、重く苦しい仕事である。否定的な意見を乗り越え、すべての人々に下水道使用を義務づけてゆく仕事は、従来の地域づくり運動の姿勢とは大きくかけ離れたものとなる。これが冒頭に述べた私の違和感である。

えひめ地域づくり研究会議のメンバーは、皆さん元気いっぱい、明るくユーモアに富んだ人達ばかりである。あつと驚くような成果をだされ、私の違和感が杞憂に終わることを願っている。

(参考文献) <注1> 愛媛県「平成10年度版愛媛県環境白書」(平成11年)
<注2> 建設省四国地方建設局、愛媛県「肱川水系河川環境管理基本計画」(平成11年)

キラリ光るまち

滋賀県甲良町

小さな町の大きな挑戦 『せせらぎ遊園のまちづくり』

甲良町グラウンドワークトラスト設立準備委員会 事務局次長

山田 禎夫



甲良町の挑戦

滋賀県甲良町は、琵琶湖の東部・湖東平野にあり、滋賀県の中央部を占める犬上郡のほぼ中央に位置し、鈴鹿山脈から琵琶湖にむかって拓けた地域。人口八七〇〇人で減少傾向にあり、面積一三六六ヘクタール、集落十三と、決して

大きくない平地農村である。

一九九〇年から甲良町では、「躍進するせせらぎ遊園のまち」を合言葉に、町内十四カ所で農業用水の分水工（用水を吐き出す施設）を親水公園にしたほか、沢ガニやホタルが棲む集落内水路整備、カブト虫や小動物が棲むことができる森整備などを、住民と行政が手をたずさえながら行っている。先人の卓抜した水利技術を生かし、町内を細やかに流れる多機能をもった用水路をモチーフにした、快適で「しっとり」としたまちづくりといえる。

せせらぎ遊園の

まちづくりの展開

甲良町は、一九八〇年をピークに財政基盤の弱いたいへん貧乏な町で、しかも、当時は、閉鎖的な行政運営（一部の人しか分からない行政運営）に対する不満も「暗いイメージ」となっていた。必然的に、町政の刷新と、それまで続いた「暗いイメージ」を払拭するための取り組みに手がつけられることとなった。そのもつとも重要な考え方は、町民に開かれた行政の展開であった。（背景期）

このような行政の刷新と並行して、一九八一年に圃場整備計画、八三年に集落内水路のパイプライン化による用水改良計画が提示されたが、それが実現してくるにつれて、住民の間から、それまでの良好な農村らしい景観と生活環境が損なわれるのではないかという危機感がわきあがって

きた。

こうした町民の声を受けて、京都大学の西口先生（故人）を委員長とする「犬上地区環境検討委員会」が設置され、集落内水路の水量低下や環境変化に対する調査が実施されて、対策が検討されるに至り、一九八五年三月には「甲良町農村景観形成構想」がまとめられ、今日の「せせらぎ遊園のまちづくり」が展開される発端となった。（発端期）

町民の水環境に対する関心の高まりをとらえて、町行政は一九八九年には「ふるさと創生事業」によって各集落に百万円を交付して「花いっぱい運動」と「集落の顔づくり」の両事業を用意した。これによって住民自らの手でまちづ



くりを推進する土俵が整った。一九九〇年には、職員手作りの総合計画を策定し、「せせらぎ遊園構想」を提示して、農村景観の保全・整備を最優先するまちづくりの方向を打ち出した。

総合計画の方針のもとに、「ふるさと創生事業」後、本格始動した住民主体のまちづくりに、国や県の補助制度事業を導入するなどして、せせらぎ遊園のまちづくりが「絵に描いた餅」に終わらないように実現の道筋をつけた。

しかも、水環境整備事業導



▶せせらぎ遊園での作業の様子

入をきっかけに四人の専門家による甲良町のまちづくりへの指導がはじまり、住民と行政による住民参加のための地域学習プロセスは、このまちづくりの原動力となっている。

町民へのアンケートによれば、計画段階からの住民参加手法による公共事業について、四分の三くらいが肯定的な意見で、特に、「地域内の絆が深まる」「地域の特性が増す」「地域への愛着が深まる」と評価している。

地域コミュニティの重要性が叫ばれている昨今において、「せせらぎ遊園のまちづくり」がもつ、公共事業への計画段階からの住民参加手法は、地域コミュニティの活性化という成果をあげていると評価できる。

グラウンドワーク

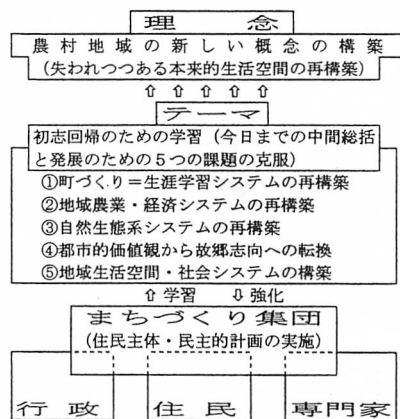
トラスト運動へ

せせらぎ遊園のまちづくりとして、集落（住民）と行政

との新しい関係づくりの展開を支えている根底は、従来の集落と行政との関係を抜本的に改革したもではなく、その底流には、昔ながらの関係、すなわち、日本社会における縦の関係が見え隠れしている。

しかし、専門家の誘導と地域住民と行政が学習を行ったことで、この底流を担保しながらも、公共事業などの計画に対する意志決定のあり方について、民主的な仕組みづくりとその実践を行うことによって、今日的な甲良町型の住民参加システムが構築されたと考えている。

現在、甲良町は財団法人日本グラウンドワーク協会のアクションプランに基づく、日本におけるグラウンドワークトラスト設置のためのパイロット事業団体として認定されている。



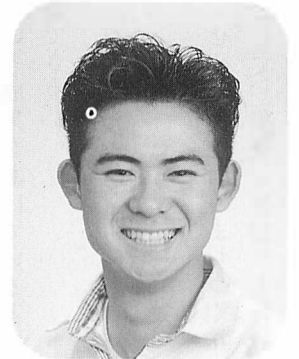
「せせらぎ遊園のまちづくり」(甲良町発行)より

全国に先駆けて当該パイロット事業を実験事業として失敗を恐れず、柔軟な思考で挑戦することによって、甲良町はもろろんのこと全国の自治体や活動団体へのノウハウを提供できればと考えている。

さらに、甲良町のまちづくりは特別といった意識を、当該パイロット事業によって、その普遍性について具体的に示すことができれば、日本の社会が地域から変わるためのクサビを打つことができる。期待と夢は大きく持っている。

はじめて小笠
原諸島の父島に
行った時の事は
忘れられません。
そこは東洋のガ
ラパゴスと呼ば
れるくらいいな
ので自然がたく
さん残っている
場所だと思っ
ていました。

しかし、二十九時間もの船旅を終えて降り立った所は東京都の父島でした。真っ直ぐに伸びるアスファルトの道路にカラフルな建物。ほとんどの人が観光で生活を成り立たせている町ではしょうがないの



かもしれない。しかし、それと引き換えに貴重な自然の姿は何処にもなかった。これほどがっかりした事はなかった。これから、父島には飛行場が作られようとしている。これが世間のいう地域活性化だとすればこの国は終わったようなものである。

松山市

今川 大将

つながりの中で生きる

人だけが潤うとすればきつと自然とのバランスが崩れ、そこには多大なる障害が起こる。人と人、人と動物、動物と森、森と川、川と海、海と人すべてはつながっているのです。こういったつながりの中で我々は生活している事を忘れてはいけません。

自分はいったことを少しでも多くの人に分かってほしくていろいろな活動をして

います。その中心に To f f i c e というものがあります。この To f f i s というのは自分が旅行先などで知り合った人たちと交流を持ち続けるためのものとして発足させました。

その中には自然を愛する人たち、芸術を愛する人たちがさまざまな人たちがいます。同じ所にずっといると、なかなか出会う事の出来ないような人たちがたくさんいます。このような人たちの感性に少しでも触れてもらえればと思

うのをやります。こういった企画を行いながら自然の大切さ、人への思いやり、造る事の喜びなど、感じ取ってもらえるものがあればステキだなと思っています。人間の一方的な文化を自然環境に押し付けたりするのはなく、これまでの文化や自然を大事にしながら新しい文化、環境ができ、お互いに共生できればと思っています。また、こうした活動を通じていろいろな「つながり」ができてきて、その中で生き、生かされているということを実感するのだと思います。

第一回
「吉田町
のれんコンテスト」
開催!!

みかん山のめぐりし
のれんと一緒に
秋風を揺れる町
愛媛県北宇和郡吉田町

風のれん
くわらくわゆる田舎道

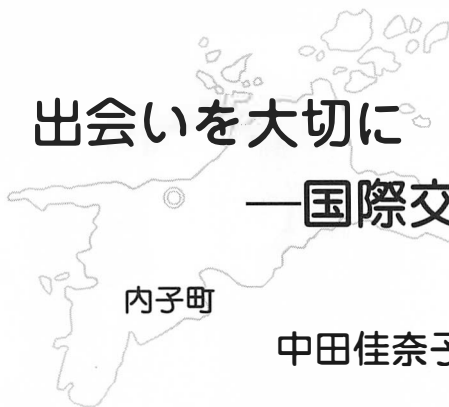
第一回
「吉田町のれんコンテスト」
10月9日(土)~10月11日(月)
観覧料無料
AM9:00~PM5:00
(観覧日6時PM3:00迄)
(会場) 愛媛県立宇和郡吉田町
★吉田町浜通り
★吉田公園
★吉田町歴史文化センター
★ギャラリー「いしづ」
★吉田町歴史文化センター
★吉田町歴史文化センター
★吉田町歴史文化センター

●問い合わせ先: 「T-office」今川
Tel: 089-953-0807
E-mail: toffice@city.igawakayama.jp

◎会場は吉田町まて観光交流センター(ギャラリー「いしづ」)に設けられています(無料観覧)

今川さんのグループが地元吉田町で先日開催したイベントのポスターより

出会いを大切に —国際交流



内子町

中田佳奈子

皆さん、今日は。私は、仕事の傍ら取り組んでいる国際交流のボランティアについてお話ししようと思います。

中学校の頃からずっと海外に夢を見ていた私は、外国語大学へ進学しました。そして、一気に世界が身近になり感激したことを今でも覚えています。

そんな環境で、私はイングランドへホームステイする機会に恵まれました。そこは、ロンドンの北にあるハットフ



ールドという自然豊かな落ち着いた町でした。滞在は一ヶ月という、受け入れ側からすれば、長期なものでしたが、とても親切でフレンドリーな家族でした。私にとって一ヶ月という短い時間でも、その町では、家族ばかりでなく、近所の大人や子供たち、毎日通ったバスの運転手さん、お店や郵便局の人々、道で出会ったお姉さんまで、本当に本当にたくさんの方々の親切、温かさにふれました。

「結婚する時は、必ずフィアンセを連れて来てね。」とよく言っていた母クリス、「寂しいよお。」と日本にまで電話をくれた幼い妹のステファニーを今でも思い出します。あの

家族・あの町を、第二の故郷として、またいつか必ず訪れようと思っています。

本当に温かく受け入れてくれた人と町。そのホスピタリティーが、ここ内子町にもあります。

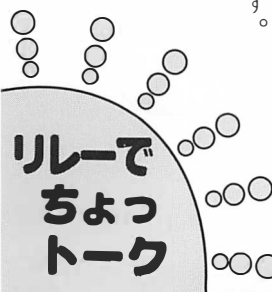
私は、(財)内子町国際交流協会がボランティア活動をしているのですが、この協会の事業の一つに、ホームステイ受け入れ事業があります。当協会では、ホストファミリーになってもいいという家族が、ボランティア登録していて、その登録バンクに受け入れを依頼するシステムになっています。

今から約三年前、内子町の友好都市、ドイツのローターンブルグ市の市長と有志の皆さんが、内子町に來られたことがあります。その際、私の家族は、デュウラー夫妻を受け入れました。日本の生活に興味津々なお二人と家族みんなで、毎日語り合い、とて

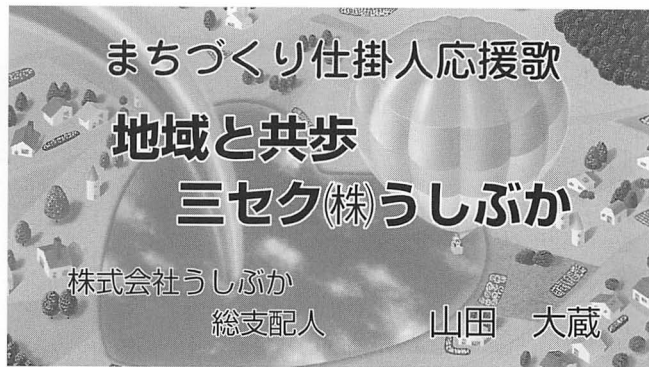
も楽しく充実した日々を送りました。お別れの時は、寂しくて涙が止まりませんでした。私の家族にとって、たった三泊四日程度の期間だったにも関わらず、二人が、本当の家族、身内のような存在になっていたのです。

「国際交流」というとどこか難しく考えられて敬遠されがちですが、要は「人と人との交流」だと思います。この人との良い出会いが、私にとって、人生最大の財産であり宝です。きっと、誰にとってもそうに違いありません。「あの日、あの時、あの場所で、君に会えなかったら」という歌がありました。まさにそのとおりですよ。

これから先も、いろんな出会いを期待して、内子町大瀬発、世界中にいろんな友好の輪が広がるといいなあと思っている今日この頃です。



リレーで
ちよっ
トーク



熊本県北のまち小国のまち
おこしに取り組んだ昭和六十
二年。今から十三年前である。

まちおこしと云う言葉が氾濫
していない時期のことだった。
このまちおこしの仕掛人
は、今も昔も変わらない「良
くて元々。悪けりや...」
出る杭は打たれる。まちおこ
しが成功すれば「ねたみの風」
失敗すれば「ザマーみろの風」
等が付きまとう。杭にしる風
にしる誰かが受け止め、地域
の為に汗しなければ、決して
動き始めるものではない。

また、三セク運営の官民一
体制においては、失敗が許さ
れない四角四面の官の仕掛け
と、失敗を恐れず臨機応変な
仕掛けの民との微妙なズレが、
運営の難しさに弾みをつける。

元々運営が厳しいことは、
施設が生まれる段階から発生
している。現場の利便性、効
率性を重視した設計ではなく、
外観の美のみにこだわった結
果、運営上、経費の増大、施
設活用の難しさが加わってく
ることになる。更には、施設
が完成する頃から俄に人材捜
し。準備期間が余りにも少な

すぎるなか見切発車の形でオ
ープンを迎えてしまう。これ
と並行して同様な施設が隣接
する市町村に誕生する。地域
間競争の激化から地域間経済
戦争へと発展している。

山のまち「小国」から 海のまち「牛深」へ

さて、ハード、ソフトの両
面での矛盾と運営の難しさを
取り上げてみましたが、これ

らのことを十分に認識し、理
解したうえで、四十数年、住
んでよかつた山のまち「小国」
から、熊本県南端の海のまち
「牛深」の地域活性化、観光お
こしに、家族と大移動して、
早三年の月日が流れた。

小国のまちおこしの核「ゆ
うステーション」を、オープ
ンから六年間、管理運営し活
性化の基礎を作った経験と全
国のまちおこし、人おこしの
講演活動で得た知識と体験を
柱として、第三セクター(株)う
しぶかの経営を実践している。
牛深は、熊本県下最大の漁



業のまちであったが、昔日の
活気とは、ほど遠い昨今であ
る。また、通過点でも停止点
でもない行き止まりのまちで、
県庁から車で三時間を要する
遠隔地である。そこに地域活
性化、地域波及効果を狙った、
(株)うしぶかが誕生したのであ
る。

まずは意識変革から

着任して二ヶ月後平成八年
十二月に温泉センター「やす
らぎの湯」、六ヶ月後に「海彩
館」がオープン。「海彩館」の年
間赤字を二四〇〇万円と見込

み、この穴埋めにやすらぎの湯の黒字を当てる！」と云う説明を聞いたとき、机上ではじき出された数字に驚き、「赤字覚悟の施設なのか！」と、体の血が逆流するのを覚えた。確かに、地の利の悪さは承知の上だが、最初から弱腰では、黒字も赤字になってしまふ。様々な逆境に向かい戦い、それを好転させるのが仕掛人の課題である。悪条件を逆手にとった仕掛けで牛深を最高の樂園に仕上げる夢がスタートした。

が・・・地域の人は「半年も続けば・・・出来るはずがない！」と遠巻きに眺め噂をし、興味津々の様子である。また、社員の間からは、「牛深は田舎だもんネ、な～んも無かとサナ」の声を耳にする。確かに立派な田舎である。しかし、その言葉の裏に潜んでいる引け腰に「何故？自分の住んでるまちに、自信と誇りを持たないのか！誇れる田舎まち。誇れる田舎人」と。他



うしぶか海彩館

所から、「つまらないまちネ」と指摘されたら気分を害するにもかわらず自ら否定する。住んでいる人が、自分のまちに惚れて惚れ込んでこそ発信ができ、まちおこしができるのである。

社員に「牛深は感動のまち、牛深は感激のまち」と朝礼で意識の変革を計り、誇れる牛深が浸透した。これが、まちおこしの原点です。

笑顔で勝負！

自分のまちを、愛し誇れる様に成った社員は、燃えている。お客様に、最高の「おもてなし」の心を提供している。足元に転がっているプラスの

掘り起こしに精力的である。お陰で「感動」と云う付加価値をつけた商品も出来上がった。

誇れるまち牛深をPRするグループ「牛深大好きPR小队」も活発に発信中。おもてなしの心でお迎えする為、日本一のトイレづくりも展開している。お客様に感激して頂ける様な笑顔で挨拶も徹底してきた。心を込めた賀状（封書）も十二万通にもものぼる。それもこれも当たり前前の事だが、工夫してお金をかけないで、社員と共歩している。

（株）うしぶかの努力目標「辛抱、学ぼう、希望」この三つのボウを柱にし歩いた結果、両施設とも初年度から黒字発進。のみならず三期連続黒字。地域からの仕入れは六七%を占め、社員（パート含）全員に年三回の賞与も支給している。

この好調な推移は、地域の人が、自分の地域を認め惚れて愛したのが要因である。本年七月に宿泊施設が揃い、観

光三点セットが出来上がった。遠隔地でも行き止まりでも、そこに住む人が元気であれば施設も元氣。三つの施設を一人で経営できるのも、社員八〇人が一致団結し、我がまちは、自分達で築くという意識の高揚である。山田の八〇歩より社員八〇人の一歩が大きく牛深を前進させている。牛深人生三年目。完全に牛深にハマってしまいました。社員八〇人の笑顔のお陰です。三七クは笑顔で勝利の道となる。

愛媛のまちおこしGの皆さん。笑顔で楽しくまちおこし！



社員一丸笑顔で「辛抱・学ぼう・希望」



— 研究員レポート —

浜田広域市町村圏との 交流を通じて

研究員 小川 龍児

先般九月二日・三日の両日、鳥根県浜田地区広域行政組合の招きにより「えひめ地域づくり研究会」の皆さんと共に、石見海岸・広浜ルートイベント実行委員会主催の「資源探しの旅」に参加した。

今回の参加については、浜田地区広域行政組合の佐々木芳資郎氏からの「しまなみ海道開通を機に、愛媛県の皆様に浜田圏域を紹介し、双方向

の情報発信拠点を求めたい。については、モデルルートを設定するために、観光エージェントの話を聞くと共に、地域づくり実践者の立場からの意見も聞きたい・・・」という一本の電話からだった。



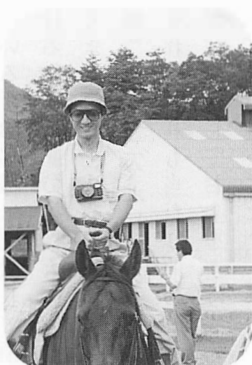
浜田圏域は、鳥根県の西部に位置し、浜田市・江津市・金城町・旭町・弥栄村・三隅町の二市四町村で構成されている地域である。

従来は各地に出向き、行政やマスコミなどに浜田圏域をPRするキャラバン隊方式を採っていたが、「実際に来てもらい長所・短所・改善点などを直接に指摘してもらう方が

効果的」という事で今般の招聘事業になったものである。

我々一行は早朝松山を出發。しまなみ海道経由で約四時間後に最初の訪問地、旭町に入り旭温泉・湯香里ランドで昼食をとり梨園などを見学した。

金城町のウエスタン・ライディングパークでは、映画の主人公になった気分で乗馬や、馬車での体験型レジャーが楽しめた。



気分はウエスタン映画の主人公

弥栄村の「ふるさと体験村」では小帯の手織り体験があったが、自分の手で直に糸を織り込んでいく手応えに、すっかり魅せられてしまった人もいて、特に男性陣の方がハマっていたようであった。

夕方からの意見交換会では、



ふるさと体験村での沙織手織り体験

実際に参加してみてものモデルルートの設定の可能性や、集客装置づくり及び観光客の誘致について、熱心に意見が交わされ、「団体よりも若い家族などをターゲットにして、売り込んだ方が良いのでは」「体験型施設を上手く活かしたら」「伝統芸能の石見神楽は強い観光資源になり得る」等々の意見が挙がっていた。

夜は、石見を代表する民俗芸能の「石見神楽」を観賞させてもらった。日本全国に残っている神楽のルーツは、多くが鳥根から発生したもので

あり、出雲・石見・隠岐の三つに分類されている。

石見エリアの神楽には、ストーリー性、ダイナミックなリズム感等があり、まるで演劇のようで迫力満点であった。現在、石見神楽の社中は大小二百を下らないそうであり、しかも後継者にも恵まれ、年々盛んとなり、世界各地からの公演依頼も相つぎ、国際交流にも大いに貢献しているとの事であった。



神話の世界「石見神楽」大蛇

二日目は三隅町で、石州和紙の紙漉き体験を行い、浜田

市の世界子ども美術館、来春オープンの水族館「アクアス」等を見せてもらった。

アクアスでは中・四国地方最大規模の水族館で、日本海に面した石見海浜公園に位置し、約千トンの大型水槽が二槽設置され、約五百種・一万点もの海の生物が展示されるとの事であり、北極海からやって来る「海のカナリヤ」の異名を持つシロイルカや、日本海の猛猛なサメなど、珍しい生物と出会えそうで、期待が持てる。

浜田圏域のまちや村は、多くの温泉と美しい自然に恵まれ、豊かな歴史や文化を今日に伝えており、人間同士の触れ合いを体感できる地域であった。特に素晴らしい伝統芸能の石見神楽は、強く脳裏に焼きついた。

* * *

今般、九月二十五日に伊予市の五色姫海浜公園において、「五色浜観月会・石見神楽の夕べ」が開催された。

これは、地域の人々とのより深い交流を希望される浜田地区広域行政組合から、どこか石見神楽の上演場所を提供してもらえる地域がないかと、えひめ地域づくり研究会に要請があったのに対し、今年から研究会議運営委員になられた伊予市の門田眞一氏が手を挙げられ、地元商店街や観光協会等に呼びかけ実行委員会を組織して、実現したものである。

台風明けの前夜、愛媛に入られた浜田広域行政組合及び石見神楽社中の一行は、開場までの間に内子町八日市護国の町並みや、双海シーサイド公園等を、地元の研究会議運営委員の案内で、熱心に見て回られた。

島根県浜田市には、双海町と同様に道の駅「ゆうひパーク浜田」があり、年中、日本海に沈む美しい夕日を観賞出来るとの事である。

山陰とは、SUN—IN（太陽の沈む地）だという事で、

「沈む夕日が立ち止まる町」双海町とは、「夕日」をテーマに、互いに頑張っ行ってきたいと言われていた。

さて、五色浜のステージには七百人を越える市民の方が集まり、丁度十六夜の月も少し顔を覗かせ盛況であった。

「美しい衣装と勇壮な舞を間近に鑑賞する事ができた。特に大蛇が口から火や煙を吐くのはダイナミックで迫力満点・・・」など、初めての神楽に感動した人々が多かったようである。

また、地元下吾川のこども獅子舞も上演され、終了後には、味付けに伊予市名産「花かつお」を使った「いもたき」を囲んで、中村伊予市長はじめ地元関係者との交流会も行われた。

今回の相互交流を通じて、今までどちらかというと、縁遠かった浜田圏域との交流が更に深まる事を期待したい。



— 研究員レポート —

再び 「ローカルに生きる」 ということ

主任研究員 藤田 享

”汝の足元を掘れ

そこに泉あり“

(県生涯学習センター主催の「愛媛学トークینگ」で、ニーチェの言葉を引いて、東北芸術工科大の赤坂憲雄教授)

地域づくりには、それぞれの地域学づくりが必要だと、当センター運営委員でもある愛媛大学の讃岐先生のご持論であるが、地域に暮らす人が、自分たちの地域のことをもっと知ろうと勉強する。すると、今まで気づかず埋もれていた

ものを発見する。それは思わぬ「お宝」かもしれない。少なくとも、地域に生きる誇りというか、アイデンティティの源となることは間違いない。

* * *

先日、えひめ地域づくり研究会議のメンバーや松山建築楽会の皆さんと一緒に、三崎町の名取という集落を訪れた。

ここは、伊達政宗の長男・秀宗が宇和島城主に封された際、仙台近隣の名取郷から連れて来られた軍馬守が住まわされた集落と伝えられる。

地元の人の案内で、集落内を歩く。海から運び上げたであろう石を丹念に積み上げて石垣が築かれ、その上にまるで雛段のように家並みが続き、その間をぬうように石段の路地が抜けている。

「一目瞭然」という言葉を、

今夏の倉敷での自治体学会の際、東京農大の進士五十八教授がおっしゃっていたが、地理的環境と歴史、それに生活文化が織り混ざって、まさに

風土に根ざした景観の最たる例のように思えた。

しかし、この風景がいつまでも見れるのであろうか。そのためには、この集落に人が住み、暮らしの中で、石積み文化が守られなければならないが、ここにも過疎と高齢化の波が押し寄せている。



名取でのフィールドワーク

景にしても、先人の汗と知恵の結晶であるが、それは耕作され、手入れされていてこそのものである。

里山にしても、人がキノコや木の実、野の草花などを採ったり見たりできてこそ、またその前提として森の中を歩いてこそそのよさである。

よく「田舎は自然が豊かだ」とか言われるが、それはもともと自然に人の手が入り、そこで暮らす人々が自然と共生しているからで、もしそういう人々がいなくなれば、自然とふれあうことなど、できはしない。

日本人の原風景と言われる棚田にしても、鳥しょ部や南予の海岸部に典型的に見られる「耕して天に至る」という表現がびつたり段々畑の風



棚田の風景 (内子町石畳)

しかし、棚田にしても、段々畑にしても、条件の悪いところから荒廃が進み、野山に戻りつつある。

人は一人では住めない。まして、棚田風景などは、とても一人や二人の手でどうにかできるものではない。

だから、集落が維持されなければ、農村景観もそこにあった文化も消えてしまうのではないだろうか。

しかし、国土庁の調査によれば、これから十年以内に消滅の可能性のある集落が、全国で四百以上、四国の中だけでも百近くあるそうである。

ところで、集落の維持に欠かせないものが、小学校の存在のように思う。集落から子どもの声が聞こえなくなったら、その地域に未来はない。

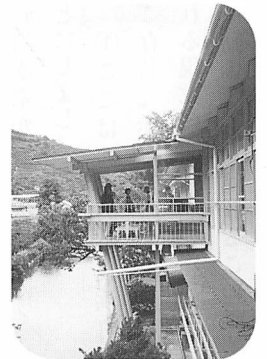
名取の小学校は、集落の一番上の石段の道を登った所にあった。現在の生徒数は全校で二十人を切っているそうであるが、一緒に歩いた三崎町

の杉山町長さんによれば、まだ統合等の話はないということであった。

最近なんでも統合ばかりであるが、それですべての問題が解決するわけではないし、大きくなるのが果たして本当に効率的かという疑問もある。

思うに、小学校は、地域のシンボリック的存在であり、地域を一つに結びつけるもののような気がする。

そう言えば、七月に訪れた八幡浜の日土ひつち小学校でも、そんな雰囲気を感じられた。この校舎は、八幡浜市役所に勤務されていた松村正恒氏の設計で、校舎の裏を流れる小川からの風が通り、採光も工夫された快適でしゃれた木造建築で、「日本のモダンイズム建築20選」に選ばれたのも、なるほどと思わせる建物であった。聞くところによると、実際の工事にあたったのは、地元の大工さんや左官さんで、自分たちの子どもや孫のために



日土小学校の川に張り出したテラス

一生懸命仕事をされたこのことで、地域とともにある学校の理想的な姿のように思った。

いずれにせよ地域のことをどうするかは、結局は地域の人自らの選択にかかっている。風景にしても、地域の人が守ろうという気持ちにならない限り、守れるものではない。

棚田の畦を管理しやすいようにコンクリートで固められても、「景観でメシが食えるか」と言われたら、ヨソ者は引き下がらざるをえない。

しかし、美しい風景のない所に人は行かないし、交流のない閉鎖的な地域に活性化の道などないようにも思う。

* * *

民俗学の父・柳田国男は、郷土研究（民俗学）は郷土

「を」研究するのでなく、郷土「で」研究する学問であると言われたそうであるが、地域のことを知ろうとすることは、他の地域のこととも知ることになる。「ローカルに生きる」とは、グローバルな時代だからこそ、世界に通じるものになる。

しかし、ローカルに生きることは「オーソドックスな居住の場」に安穩としている私などには、あこがれはしてもなかなかできそうにないし、地域に埋もれている資源を発見する眼など、そんなに簡単に養えるものではない。せめて、ローカルに生きる知恵をもっと「聞き書き」することにより、影ながら応援団を務めることぐらいであろうか。

二〇〇〇年まであと百日を切った。私たちは自分の子や孫に、心に残る風景を見せてやれるのだろうか。ガラにもなく物思ふ秋の夜長であった。



長浜大橋

“MY TOWN” “らおっちゃんく”

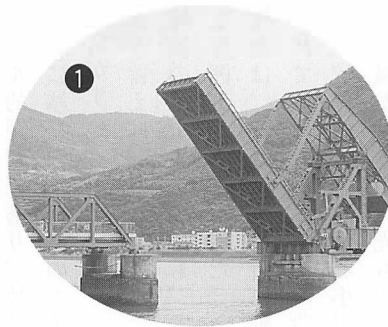
歩キ目デス & 足ラテス



第九弾

岡崎 直司

決めて、その中に存在する様々なモノたちに万遍なく視線を向ける方法。もう一つは、何かにテーマを絞ってそのモノだけにこだわった見方を積み重ねてゆく方法。どちらでも、それぞれお好みに応じて、性に合うやり方でウオッチングをすればいいワケです。何れにしても、そうすることで



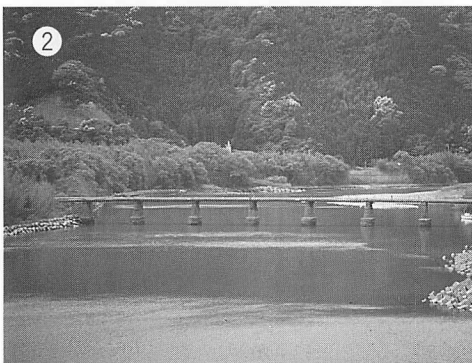
長浜大橋

『伊予路の端々橋巡り』
さてオタチアイ、ウオッチング実践篇として、これまで様々なものに目を向けて来たけれど、大きく分けて二つの捉え方があるようです。
まず、どこか地域エリアを

決めて、その中に存在する様々なモノたちに万遍なく視線を向ける方法。もう一つは、何かにテーマを絞ってそのモノだけにこだわった見方を積み重ねてゆく方法。どちらでも、それぞれお好みに応じて、性に合うやり方でウオッチングをすればいいワケです。何れにしても、そうすることで

何かが見えてきます。
今回は、表題のように「橋」にテーマを絞って見てゆくことに致しましょう。一口に橋と言っても、それはもうピンキリですから、珍しい橋や面白いエピソードのある橋を歩キ目デス流に見てゆきます。
大体、素材で見てゆくだけでも色々、木橋、鉄橋、コンクリート橋、そして石橋。お日にかかっているのは紙やプラスチック、瓦や陶器製など。紙の町川之江に紙の橋や、瓦の町菊間に瓦の橋があってもいいのだけれど、まだ登場してはいないようだ。そう言えば、徳島県の祖谷には有名なかずら橋があるけれど、蔦かずらだからジャンルは木橋かなあ。
では、県内最大河川である肱川水系から順次見てゆくことにしましょう。

①ここは河口の町長浜町。ご存じ「赤橋」の名で親しまれる現役の開閉橋があります。可動橋とも呼ばれるこの動く

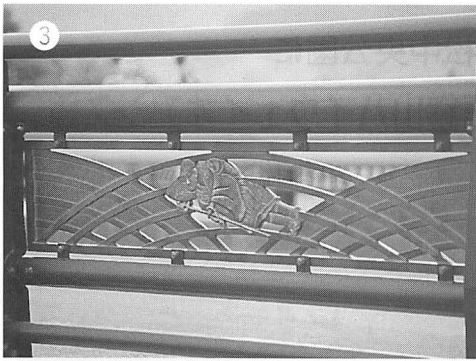


白滝橋

橋は、現役では最古というところで、国の有形文化財にも登録されています。昭和十年、辣腕町長西村兵太郎（長浜高校に銅像）によって、当時新進気鋭シカゴ帰りの橋梁技術者増田淳の設計で完成します。
元々この町は、かつて日本三大木材積み出し港として栄えたほどで、船が頻繁に開閉橋を上下していた。因みに他の二つは秋田県能代市と和歌山県新宮市。
忘れてならないエピソードがもう一つ。この橋の至る所、注意深く観察すると、何カ所

か親指大の穴が空いている部分があります。何を隠そう、第二次世界大戦の爪跡、米軍機グラマンによる機銃掃射の弾痕が見つかります。戦後半世紀を超え、現役の語り部が激減中の今、平和教育の観点からも戦争遺産としてのキチンとした表示が欲しい所。

②では続いて上流へ向かいます。ここは白滝橋、同じ町内ですが、県内では珍しくなった沈下橋があります。黙っていれば四万十川風景です。下流側の柿早橋と合わせて、かつて暴れ川として洪水が多

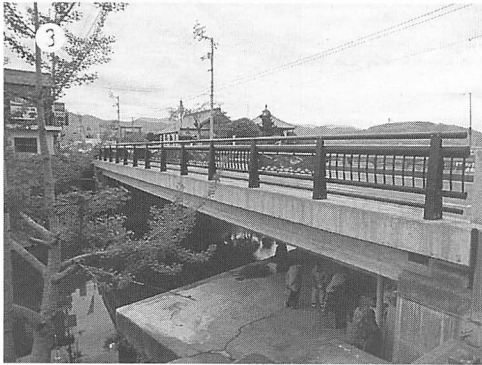


十夜ヶ橋

かった肱川の側面が伺えます。この他、大洲市菅田の成見橋も同じタイプ。

③これは十夜ヶ橋。四国遍路の番外札所として有名。必ずお遍路さんは立ち寄ります。肱川の支流矢落川に注ぐ都谷川にかかり連日香華が絶えない。

諸国巡錫の弘法大師が宿を求めた折り、泊めてもらえず仕方なく橋の袂で一夜を明かしたが、寝苦しくてそれが十夜にも思えた、というエピソードの地。でも、親切な大洲人で行き合わなかったお陰？

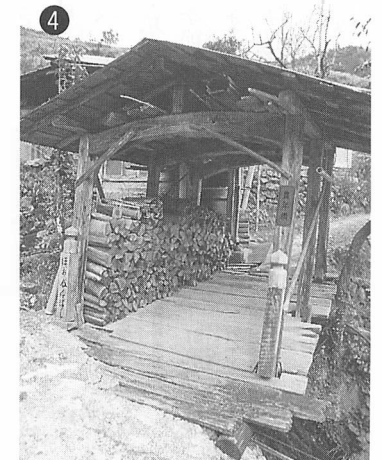


で、こうして縁の地として賑わっている。地元感覚としては複雑な心境かも知れない。ともかく、今も橋の下ではお大師さんが寝んでいる為、この橋を渡る遍路の方々はその間、杖をつかない習慣となっている。ウォッチャーとしては、R56号をひっきりなしに通るトラックの方が気掛かりではありました。

④では、ゲグツと上流へ向かって、ここは河辺村。最近有名になって来た屋根付き橋をご紹介します。

アメリカではカバードブリッジ。例の映画「マディソン郡の橋」では、クリント・イーストウッド扮するカメラマン、キンケイドと農婦フランチェスカの大人の恋が話題となった。

さて日本版ではどうか。素敵な出会いの有る無しはともかく、河辺村では地域おこ



豊年橋

に一役買って、新設の橋も含めて浪漫八橋ということ目下売り出し中。中でも愉快なのがこの豊年橋。今は個人宅の橋になっているが、すぐ側にその家の風呂があり、薪などが積まれている。是非、世界最小の屋根付き橋ということでギネスブックに申請して欲しいシロモノだ。

この他、内子町石畳地区や野村町惣川、城川町魚成にもあって、新しいのも含めると十三橋の屋根付き橋が、この肱川水系のみに何故か存在している。

では、次回も橋巡り、乞うご期待。

小松中央公園に 『石鎚山ハイウェイオアシス館』 小松町



〈営業時間〉 午前9時～午後5時
 〈休館日〉 無し
 〈問い合わせ先〉
 石鎚山ハイウェイオアシス館
 ☎ (0898) 76-3111

「あしす市場」が開かれています。

松山自動車道石鎚山サービスエリアに隣接して、「石鎚山ハイウェイオアシス館」が八月オープンしました。

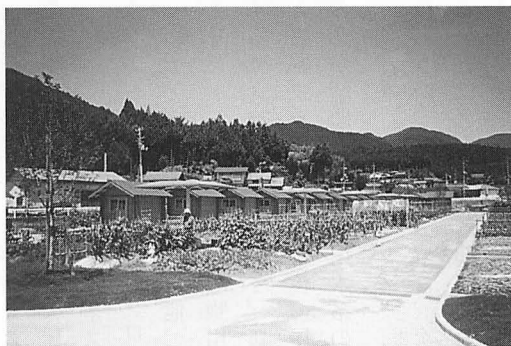
高速道路利用者はインターチェンジを出なくても施設利用ができ、小松中央公園側の一般道からも入ることができます。

館内には石鎚山の鎖場やスキー場、霧氷などを体験できるコーナーのほか、地元特産加工品や工芸品などの展示・販売コーナー、レストランなどがあります。

また、屋外では地元でとれた野菜や果物、花などを販売する「お



久万農業公園 『アグリピア』 久万町

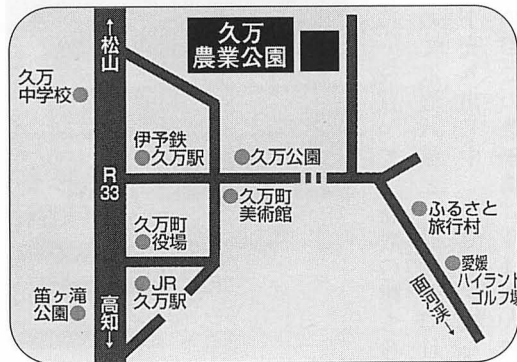


〈営業時間〉 午前8時半～午後5時
 〈休館日〉 無し
 〈問い合わせ先〉
 久万農業公園「アグリピア」
 ☎ (0892) 41-0040

久万を舞台に意欲的な農業に挑戦する人のための活動拠点として、久万農業公園「アグリピア」が、四月からオープンしています。

新規就農者を対象に実地研修や研究栽培などを行う「農業研修センター」、都市住民が営農できるログハウス付き農園「久万高原クラインガルデン」、青空市やイベントなどを開催する「ふれあい広場」の三施設からなっており、季節の味覚狩り(要予約)も楽しめます。

十月二十四日(日)には、「収穫祭」が開催される予定です。



文化交流ヴィラ 『高橋邸』 内子町



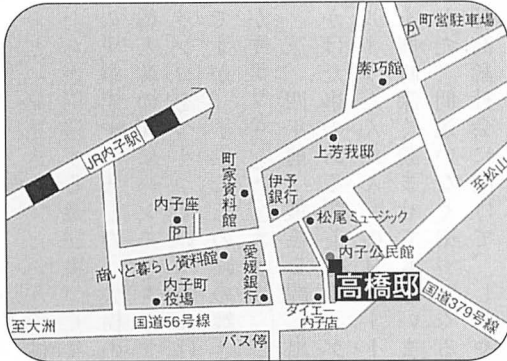
さい。

〈開館時間〉午前9時～午後4時
 〈休館日〉火曜日
 〈問い合わせ先〉
 文化交流ヴィラ「高橋邸」
 ☎(0893)44-2354

高橋邸は、日本の麦酒業界の繁栄に貢献し、戦後の経済復興期に通産大臣として大きな業績を残した高橋龍太郎翁の生家で、そのご遺族によって平成五年に内子町へ寄贈されました。

内子町ではこの建物を文化交流ヴィラ「高橋邸」として一般公開しており、研修会や小会議、お茶・お華などの文化活動、ゲストハウスとして利用できます。

また、近所の主婦達でつくるグループ「FUGA（風雅）」が案内役のかたわら喫茶店を開いていますので、お気軽にお立ち寄りくだ



旧村役場をゲストハウスに 『大瀬の館』 内子町



〈開館時間〉土・日の午前10時～午後3時
 （平日は、大瀬公民館に連絡すれば利用可能）
 〈問い合わせ先〉
 大瀬公民館（大瀬の館すぐ手前）
 ☎(0893)47-0102
 大瀬の館（土・日のみ）
 ☎(0893)59-9006

も開かれています。

ノーベル賞作家大江健三郎氏のふるさと、内子町大瀬・成留屋地区に旧村役場を改築したゲストハウス「大瀬の館」が七月にオープンしました。

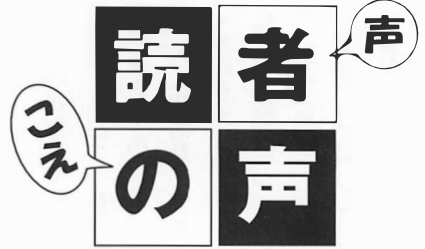
大江氏の生家から徒歩一分の所にあり、一階は、大江氏の出版物や関係資料を常設展示するほか、企画展を行っています。

二階は、交流や宿泊用の大小の畳間三室と台所、風呂などがあり、大江文学の素材となった大瀬の自然や町の風景の中でゆったりとした時間を過ごせます。

また、毎月第二日曜には、「市」



舞たうん



今日の基本的な地域課題は、「少子高齢化—人口減少」という史上はじめての事態を、問題状況としてではなく、あたりまえの状況として、いかに積極的に位置づけられるかという点にあると思います。阿蘇地域では、広域連携により、このための取り組みを始めています。

『舞たうん』の内容はバラエティに富んでいて興味深いと思いますが、誌面構成がその割に単調な感じがします。羅列的に見えるのは「余白」の使い方もしれません。

若井康彦さん
(財)阿蘇地域振興デザインセンター

つい先日、フリーマーケットと「発見きち」という子供たちが創造する遊び場づくりの実験をやりました。大樹の幹と幹の間にハンモックやブランコをつくっていったわけですが、子供たちの瞳の輝きがキラリしていました。

三、四年前、鏝絵を観に出かけた事のある関前村の「グループだんだん」のリポートを興味深く読ませてもらいました。間違いなくやってくる超高齢社会に向けて、しなやかな活動をされてることは、とても参考になりますね。

岡崎直司さんと毎月交信しています。ボクも見逃しているモノを掘り起こす作業を続けています。

平井悦夫さん
(広島県福山市)

仕事柄、愛媛県内の商工団体等から、ご依頼がありますので、市町村の地域活動の様子の子備知識が得られて参考にしています。

第十七回逆手塾に、ご参加いただきまして厚く御礼申し上げます。今回最後に和田・

初代事務局長から「抜命宣言」がありました。来年一月の「過疎逆総会」までの間に、関係者による議論を重ねながら、新しい方向づけをしたいと存じます。

瀬戸武治さん
(広島市)

具体的な事例が豊富に載っていて参考になります。足を使った取材が素晴らしいですね。

清水義晴さん
(新潟市)

各地域の暮らしぶりに加えて、お年寄りに対するきめ細やかな活動や取組みにパワーが感じられました。のんきな新社会人一年生の私には、人とのふれあいなどいろいろ考えさせられたひとときでした。

誌面にも限りがあると思いますが、クロスワード・季節の一品・暮らしの知恵などの一ページがあると、今以上に楽しめるのではないかと思います。

J A 媛子?さん
(北条市)

BOOK INFORMATION

●風景デザイン

進士五十八、森清和ほか著
学芸出版社
A 5版 3,200円(税別)

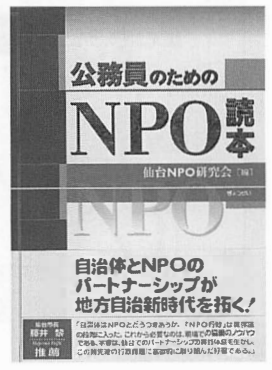
全国各地の景観行政や、まちづくり運動に参画し、相談ののってきた筆者らが美しい風景、いい風景をいかに創り育てるか、その意味と取り組み方の道すじを具体的事例をおり混ぜつつわかりやすく提示。



●公務員のためのNPO読本

「仙台NPO研究会」編
ぎょうせい
A 5版 2,000円(税別)

市民の行政への参加・参画の促進が唱われる今日、自治体はNPOとどうつきあっていくべきかといったとまどい声に、わかりやすく答える自治体とNPOのパートナーシップを勉強するための参考書。



☆まちセンからのお知らせ

「21世紀のえひめのむらづくりを考えるシンポジウム」共催

テーマ『むらは残せるか』－日本人の原風景を消さないためにも－

21世紀えひめ村づくり推進協会主催のシンポジウムの企画運営を、今年度もまちセンで、お手伝いしています。

- と き 平成11年11月11日(木) 13:00～17:00
- ところ にぎたつ会館(松山市道後姫塚)
- プログラム ○基調講演 「水と緑の国、日本」
講 師 富 山 和 子(評論家、立正大学教授)
○パネルトーク
コーディネーター 中 川 聰七郎(愛媛大学農学部教授)
パネラー 亀 本 耕 三(農業〈大洲市田処〉)
板 倉 聖 治(農業〈吉田町奥浦〉)
森 原 直 子(詩人〈松山市〉)
岡 田 文 淑(内子町町並・地域振興課長)

■申込み 10月29日(金)までに、21世紀えひめ村づくり推進協会(☎089-943-2800)へ

「西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業」参加者募集

愛媛県主催の「西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業」の企画運営を、まちセンでお手伝いすることになりました。

- と き 平成11年11月25(木)～27日(土)
- テーマ 『まちづくり・むらおこしの発祥地は今』
- 訪問先 大分県大山町・湯布院町
- 内 容 ○大山町 緒方英雄さんの講話、視察、交流会
○湯布院町 田井修二さん(交渉中)の講話、視察、交流会
- 費 用 旅費については、県で負担
- 募集人員 地域づくり活動に積極的に取り組んでいる方10名程度
- 問い合わせ まちセン ☎089-932-7750(担当:藤田、檜垣)

「地域づくり研究アシスト事業」の支援申請受付中

地域において自主的に活動する地域づくりグループ・団体が実施する学習・研究活動に対して、まちセンでは、今年度あと3グループ程度の支援を予定しています。

- ①支援対象グループ・団体
活発に学習・研究活動を行っているグループで、原則として、会の運営が会員の会費によって賄われているところ
- ②支援対象経費
学習・研究活動のために招くまちづくり実践者などの講師の謝金等

■問い合わせ・申し込み先 まちセン ☎089-932-7750(担当:藤田、沖田)

☆まちセンからのお知らせ

「地域づくりとインターネットの活用」研究フォーラム開催

まちセンでも、このほど遅ればせながらホームページを立ち上げましたが、内容の更新などに苦労されている担当者の方も多いことと思います。

そこで、各市町村のホームページ担当者やインターネットに興味のあるまちづくり関係者が一堂に会し、日頃の悩みやインターネットを地域づくりの手段として有効に活用していくにはどうすればよいかなどを、出席者全員で討論するフォーラムを開催します。

- と き 平成11年11月18日(木) 13:00~17:00
- ところ 久万高原駅「やまなみ」2階ホール(久万町)
- プログラム ○基調講演 墨岡 学 (松山大学教授)
○フロアトークン
アドバイザー 大富仁紫 (株)デジタル・トゥワード代表取締役
- ※フォーラム終了後、交流会を開催予定
また、翌19日(金)にはパソコンの実務研修教室を予定
- 問い合わせ まちセン ☎089-932-7750 (担当:檜垣、沖田)

地域づくり研究サロン「イベントによる地域活性化術」開催

県内各地で様々なイベントが繰り広げられていますが、マンネリ化等により苦戦しているところも多いのではないのでしょうか。

そこで、(財)地域活性化センターの地域イベント実務研修会の講師でおなじみの松井渉氏をアドバイザーに迎え、もう一度イベントとは何かを問い直すとともに、それぞれの抱えている問題や悩みをぶつけ合いながら解決策を探っていく研究サロンを開催します。

- と き 平成11年12月3日(金) 13:00~17:00
- ところ 愛媛県生活保健ビル 5階会議室(まちセン事務所の隣)
- プログラム ○基調講演 松井 渉 (地域活性化コンサルタント)
○サロントークン
コーディネーター 若松進一 (双海町地域振興課長)
- ※研究サロン終了後、ひざづめ交流会を開催予定
- 問い合わせ まちセン ☎089-932-7750 (担当:檜垣、小川)

朝晩と過ごししやすい季節となりました。

大予言で不安な日々を送っていた人も、ひとまず安心?これも当たるはずが何らかの奇跡によって免れたのだとしたら、私たちはとてもラッキーな未来を手に入れることが出来たのかもしれない。

そういうふうになると、時間はずっと貴重ですね。(沖田)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町八丁目二三四

愛媛県生活保健ビル五階

(財)愛媛県まちづくり総合センター

TEL089 (932) 7750

FAX089 (932) 7760

発行/平成十一年十月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

印刷/三創印刷株式会社